意識術師の時間流動

織宮征

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
意識術師の時間流動

【Ｎコード】
Ｎ５６４５Ｚ

【作者名】
織宮征

【あらすじ】
人間に備わっている【意識】という機能を向上させて異能を発揮する者――意識術師。過去に最強の意識術師、【時の調律者】として名を馳せていた皇景一は、現在ではフリーの『何でも屋』を営んでいた。そんな時、彼は四泉一族という意識術師の一族からある依頼を受ける。◆春先のライトノベル新人賞に応募予定の作品です。

始まりの夜

その町での初仕事は、これまでの仕事と照らし合わせると楽なものだと思えた。

都心から少しばかり離れたとある町。都市開発が発展しているわけではなく、かと言って田舎じみた田園地帯が広がっているわけでもない。どこにでもある普遍的な風景が見受けられる町だ。

それが、皇景一（すめらぎけいいち）がこの町に抱いた第一印象だった。何の面白味も感じられない……しかし普遍的だからこそ暮らし易そうな町とも思えた。

深夜十一時。オフィス街の高層ビル屋上、フェンスの前に寂然と佇み、彼は夜の町を俯瞰する。高所に居る為か吹き抜ける風は強く、うなじで束ねられた長い黒髪がなびく。

男性にしては肌が白く女性の肌質に近い。身長は百七十センチ後半と言ったところか。白色のシャツの上から黒いロングコートを身に纏っている。

十七歳という年齢にしてはその顔に感情が足りないように見えた。端的に言えば無表情だった。と言っても、それは彼の歩んできた人生から生じたものである。

毅然で、酷薄とした無表情は他人に何の影響も与えない。事実、それは彼が所属していた組織の人々も認めていたものだ。

「――近いな」

景一は消えそうな声とも取れる呟きを漏らした。

依頼人であるあの一族の当主の話が嘘偽りのないものだとしたら、今頃、一族の分家の者もこの周辺を巡回しているだろう。

そして、それを完全な事実にするには、分家の者が遭遇し、それをこの目で確かめる他ない。

しかし、あの当主は「これ以上の犠牲を出すわけにはいかない」とも言っていた。その為に自分に依頼をしたようなものだ。ここで

契約を破るわけにもいかない。
元より、この仕事は自分の実力を買っての依頼なのだ。無様に失敗するわけにもいかないが、あの話が真実なのか確かめたいという好奇心も己が内にある。
（だが、考えている暇はないな）
そう考えている矢先、それの気配を察知した。町を俯瞰する彼の眼の先で、それはすでに顕現を始めていたのだ。
「……嘘じゃなかったのか」
多少の動揺を自覚しながら、景一はその場所を視た。この高層ビルから五十メートルほど離れた場所にいるのはそれと、慌てふためきながらも術を行使しようとしている一族の分家筋の者だった。
結界を張っているところを鑑みれば、まだ一般人への配慮を忘れていないと窺えるが……
（……疑問は残るが、まずはあれの始末、か）
この矛楯については翌日にでも当主に相談すれば良いだろう。そう判断した景一は、高さ二メートルはある金網状のフェンスを乗り越え、その場から地上に向かって高く跳躍した。

「くそ、どうなってやがる！？」
黒い殺気を見に纏っている四泉（しせん）一族の分家筋の人間――四泉貴人（しせんたかひと）は、八メートル前方に在るそれから眼中に収めながら、荒ぶった声を漏らした。
この現状から逃避したくなりながらも、彼は四泉一族の人間としてその考えを即座に捨て去る。
自分と同じく町の巡回を行っていた仲間の術者はすでに死んでしまった。結界を張った術者もその内に入っている。
結論で言えば、術者が死んでしまった以上徐々に結界の効力は解けていき、残り三分ほどで消滅してしまうという状況だった。
故に、その三分間でこの化け物を殺さなければ一般人に被害が及ぶ。

貴人は、この世の生物とは思えない『影』から目を逸らしたくなるが、そうはしなかった。目を逸らしたら最後、傍らに転がっている二人のように一瞬で影の一部に斬り殺されてしまうだろう。

前方に佇む黒い霧が固体化したような『影』の正体は解っている。これは滅び去った妖魔、邪霊の残滓がその精神を現世に残し、他の残滓と結合を果たして顕現を行う『魔的意識体』だ。

魔的意識体自体は、一般的な術者の部類に属する者ならば殺すことは可能とされている。しかし、この魔的意識体はどこかおかしい。当主から任務を授かった時に聞いたように、普通の魔的意識体とは何かが異なっている。

「くそ！」

貴人は焦りを覚えながらも、自分の殺気を増幅していく。文字通り、この魔的意識体を殺すという意志を脳内において向上させた。

先ほどまで纏っていた黒い殺気が、徐々に変色を成していく。仲間の二人が殺られたという憎悪を正しい感情として意識し、攻撃概念として成立させる。

「意識変革――レベル３！」

この瞬間、貴人の『意識』が常人の三倍に達した。意識という機能を向上させる自己暗示。この手順を踏んだことによって、全ての感覚機能が最大限に研ぎ澄まされ、己が内界に宿す禁忌に触れることが可能となった。

至高となった意識は、兼ねて四泉一族の人間が宿す異能との同調を果たす。

貴人の体を纏っていた黒色の殺気が、その色彩を紅色へと変色を成した。

古より伝わる『意識術師』の一族、四泉一族の宿す『意識術』――それは殺気の具現化にある。喜怒哀楽という感情を基板とし、『脳内で【意識】した怒りの感情を攻撃手段へと昇華させる技』であった。

この『殺気意識術』の中でも、赤の殺気はれっきとした上位の退

魔概念として成り立っている。
故に、魔的意識体が赤の殺気を食らって消滅を免れることなど叶わない、と貴人は確信した。
貴人は右手の掌を魔的意識体に向け、体に纏う赤の殺気を開放した。皮肉にも、仲間二人が殺られたことによる殺気の向上を利用して。
赤の殺気は右手に集う過程において凝縮し、摂氏一〇〇〇度という大熱量の内包を得て放たれたものだ。それは、四泉一族の『殺気色彩論』において、赤へと昇華した殺気は火の元素を宿すことになるが故。
魔的意識体と呼ばれる黒い『影』は、赤い殺気にあっけなく呑み込まれた。
この時点で、本来ならば魔的意識体が消滅するのが是となる。元より、意識術というのは古来から魔的意識体を滅ぼす為に編み出された秘術であるからだ。
故に、四泉一族の上位概念――必殺とも言える赤の殺気が勝利の一撃となるのは自然の摂理といっても過言ではなかった。
「な――」
だからこそ、上擦った声を上げた貴人の狼狽は本物だった。
黒い影――魔的意識体と呼ばれる存在は滅びていなかった。いや、正確に言うならば……
「俺の殺気を、喰ってる、のか……？」
分かる。自分が作り出して放った攻撃だからこそ理解できる。この魔的意識体は赤の殺気を吸収し、我が物にしている。
その証拠が、今現在の魔的意識体を保っている存在的な色だ。
存在を象っていた黒い影は燃えるような赤へと変色し、まるで大型の火の玉を連想させる形状になっていた。
「■■■■、■■■■――」
魔的意識体が呪いめいた音を発した。ノイズが掛かったような雑音だった。その音が余韻を残さずに風邪に溶けた瞬間、魔的意識体

は影の中心部位から大熱量の炎を放った。
「ひ――っ！」
吸収した火の元素が、逆に貴人へと襲いかかる。
貴人が放ったような低範囲の攻撃ではなく、幅十メートルはある攻撃。それはまさしく火の海だ。食らったら跡形もなく溶解するであろう魔の炎に、貴人は為す術もなく呑み込まれようとしていた。

「世界の意識よ、その理を変えろ」

しかし、その時。この局面に侵入を果たした『一つの意識』によって事態は大転換を成す。
誰かが唄うようにそう呟いたのだ。女性とも、男性の声質にも取れる中性的な音色（こえ）だった。
瞬間、貴人に襲いかかった火の海がその勢いを止めた。
否――これは『止めた』や『静めた』などという表現は全く適切ではない。

時間が殺され、世界の理が変化したのだ。

「結界が維持されていたから可能だった」
貴人の傍らには、いつの間にか黒いロングコートを羽織った少年――一族の当主が雇った皇景一が超然とした様（さま）で佇立していた。
「消失まで残り一分二十三秒の『意識結界（いしきけっかい）』。その所有権を奪った。見た限り……普通の魔的意識体じゃなさそうだな」
漆黒の瞳が魔的意識体と中空で停止している炎に向けられる。
その、この状況で明瞭なまでに平静を保てている景一を、貴人は憎むような目で睨めあげる。
「なに安心しきってんだ！　仲間が二人殺られたんだぞ！？　雇われの身ならもっと早く来やがれ！」
半ば以上本気で涙目になりながら、貴人は声を荒げた。

その言葉に、景一は冷めた視線を背後に向けた。
「――魔的意識体が存在の一部を刃に変えて、攻撃を回避できずに斬り殺されのか。それは不運だったな。だが――」
もう興味がなくなったと言わんばかりに前方に向き直り、景一はこう断じた。
「弱かったから死んだ。それだけのことだ」
「あ、あんた――！」
「俺の仕事はあんたらを守ることじゃない。『犯人』の始末だ。だからあんたらと慣れ合うつもりは毛頭ない。それと、あんたとの話を長引かせるつもりもない」
景一が強引に奪ったこの意識結界の種類は、ただの人払いの結界だ。所有権が自分に渡ったが故に時間の停滞を行えたが、こんなチャチな結界では魔的意識体がいる範囲の停滞がやっとなのだ。
「だが、死んだ術者が残した一分二十三秒を無駄にはしない。殺した時間を再開させるぞ」
景一は右手を肩口辺りまで上げて、指を鳴らした。
同時に、魔的意識体の放った炎が動き始めた。以後の一秒で、景一と貴人に覆い被さるように炎が接近した。炎に呑まれて絶命するまで、残り〇・五秒といったところか。
しかし。
「――意識変革、レベル３」
景一はその結末を否定し、結果を逆転させた。
「意識結界の所有権を奪取し、時間の流動変化を開始」
覆い被さった炎が、あたかもビデオテープの映像が巻き戻されるように後退を始める。
「有る筈だった結果を【意識】し、流動する時を逆転する」
瞬間、轟！！　という轟音と共に、魔的意識体は自身の放った炎に呑み込まれ、意識の消失……絶命へと至った。
「な……こ、これは一体……」
その一連の光景を目の当たりにした貴人は、現実を直視できず、

だらしなく口を開けて唖然としていた。
「意識結界が解けるまで、残り三十秒といったところか」
対照的に、景一はこの結果を当然の幕引きだと受容し、踵を翻す。
「明日はあんたらの屋敷に邪魔するつもりだ。早く帰って当主に伝えろ。もっと使えるヤツを用意しろってな」
神経を逆なでするような台詞だが、一人残された貴人は呆然としながら無意識に頷いていた。
（これが――）
そう、これが皇景一の実力。
先ほどの流れは、もはや戦いではない。ただの一方的な勝利に過ぎないと実感し、貴人は確かな恐怖と戦慄を覚えた。
そう、これが。
現存する意識術師を束ねる組織の元最高幹部――【時の調律者（ちょうりつしゃ）】と呼ばれていた者の力の一片であった。

四泉碧海

四泉一族は、古より意識術を行使できる素質がある乳児が生まれてくる。才能という要素を除き、その確率は一族が始まった二千年前より一〇〇％を維持してきた。

四泉一族だけが用いる唯一無二の意識術――『殺気意識術』を行使する為、殺気という感情を覚え、その力を御しきるだけの自制心を己が内で成立させる。それが四泉一族で生まれた者の責務と言えた。

故に、その殺気意識術という非現実的な異能（ちから）を行使でき得る四泉一族は日常世界を守護する役目をも担っていた。

そして、つい最近になって、その役目を存分に発揮する事態が発生した。

それが、この町における魔的意識体の異常なまでの大量発生、そして生半可な意識術師では滅することが不可能という現実であった。

しかし、その原因と呼べるものが自分達の一族に有るということを、彼らはまだ知らなかった。

その日の朝、四泉一族の者が暮らす屋敷の内部――大きな庭園となっている場所に、その少女はいた。

小池の手前に腰を下ろしている、巫女装束を違和感なく身に纏った少女だった。肩より少し下辺りまで伸びている黒絹のような直毛が風で静かになびく。顔の造型もこれまた出来すぎていて、日本中の女性が羨むようなきめ細やか純白の肌に小さな顔立ち。鼻筋もしっかりと通っている。栗鼠のように大きな瞳は目尻を垂らして細められ、桜色の口元には薄い微笑を刻んでいた。身長は女性の平均値より少し高めで百六十センチはあるだろう。

すらりと伸びた長く細い両脚を池の水部に浸けて、冷めた水温を肌で感じながら楽しそうにちゃぷちゃぷと動かしていた。

これが四泉一族の直系、四泉碧海（しせんあおみ）の朝の恒例行事であった。
自然の趣をその身で直に感じ取り、心身ともに清らかな気持ちにさせる。ここ最近では物騒な事件が連発しているが故か、こうして落ち着いた時間を設けるのも一苦労だった。
不意に聞こえてきたチチチ、という動物の小さな囀りに俊敏な反応を示した碧海は、ゆっくりと顔を上げる。見ると、小池の反対側に植えられている樹木の小枝で一匹の小鳥が羽を休めていた。
「――おいで」
胸の近くまで右手を持ち上げ、細く白い人差し指をピンと伸ばした。碧海の呟きに反応した小鳥は羽を羽ばたかせ、放物線を描きながら彼女の指に足を乗せる。
そろそろ成長期に突入するであろう小鳥の丸い目を見つめ、碧海は「そう――」と柔和な笑みを浮かべる。
「親鳥とはぐれちゃったのね。じゃあ、私も一緒に捜してあげる」
小鳥にそう言った碧海は、静かに双眸を閉じて意識変革を始めた。
ここで言う意識変革とは、意識術を行使する為のものではない。確かに己が内にある意識（ちから）術を使役するには意識変革の起動が必要不可欠とされるが、それはあくまで『戦闘用の意識変革』である。
対して今、碧海が行なっている意識変革は『日常で頻繁に使用する意識』――つまり身体の感覚器に対する意識レベルの向上だった。
碧海の意識は、すでに至高体験レベルにまで達していた。聴覚に全意識を集中させ、この周辺に存在する鳥類の『鳴き声』の本質を聞き取り、生態としての種類を選別し、親鳥と思われる呼び声を感じ取る。
この時、常人を遥かに超越した聴覚によって、碧海は周辺に居る鳥類の位置を完璧に鳥瞰していた。
「……見つけた」
再びゆっくりと両眼を開き、自分の座っている向きから西に首を向ける。
そして、人差し指に佇立している小鳥に伝え事を行った。

「ここから西南、四十五メートルの座標にあなたのお母さんがいるわ。自分で飛んで行けるよね？」
可愛らしく小首を傾げ、そう訊く碧海に――小鳥は小さく頷いたように見えた。
小鳥は羽を羽ばたかせ、碧海の指定した場所に向かって飛翔していった。
「ばいばい」
小鳥の乗っていた右手を振りながら、碧海は笑顔で別れを告げた。
「さて――」
と、碧海は水部に沈めていた両脚を池の外に出して、隣に置いておいた白地のタオルで水気を拭き取り、下駄を履く。
「――そろそろかしら」
自分の体内時計が狂っていなければ、もうじきこの屋敷に宗主の雇い人が姿を現す筈だ。当主とその付き人の話を傍聴した辺り、自分と同い年の少年であるとか。
その、『非日常に属する同い年の少年』という辺りに碧海は興味を持っていた。しかしそれは通っている高校が女子高であるから、一族の人間の中に近しい歳の子供がいないから、という意味合いでの心境ではない。
その少年は、世界に存在する全ての意識術師を束ねる組織――意識術師達の総本部と呼ばれる『創世の塔』において、若干十六歳で最高幹部に抜擢された過去を持っているらしい。今では非日常に関する事件の解決を請け負う、フリーの何でも屋を営んでいるようだ。
しかし事実、碧海が注目しているのは創世の塔における最高幹部であったことではなく、その後の話……なぜ、最高の地位を与えられたにも拘らず、フリーの何でも屋など営むようになったのかであった。
その、普通の意識術師ならば最高の名誉に値する人生を自ら捨てた理由。それが気になって仕方がなかった。
「……まあ、それは私も同じか」

自嘲気味に薄い笑みを浮かべながら、碧海は屋敷の縁側まで足を運ぶ。左右に重心がブレない、体の中心線を保った完璧と言える歩法だった。

縁側で脱いだ下駄を綺麗に揃え、裸足のまま、木造の廊下を歩き始める。それなりに年季の入った屋敷であるためか、歩を進める度に焦茶色の床が小さく悲鳴を上げた。

しかし、それも愛嬌があって良いものだと思っている辺り、碧海はこの生まれ育った屋敷を好きでいるようだ。

昨晩、碧海が四泉一族の現宗主から命を受けたのは深夜二時を回った頃だった。何でも、「明日の午前八時丁度、私の自室に来なさい。会わせたい者がいる」とのことだった。

その日の夜は、街に出没した魔的意識体の抹殺任務で碧海は心身ともにそれなりの疲労を被っていた。故に昨夜、宗主から聞かされた話は今日の朝になるまで忘失状態だったのだが――なるほど、考えてみれば、自分と会わせる者など付き人と話していた皇景一という男に違いないだろう。

宗主が何を考えているのかまだ完璧に理解してはいないが、あの父親のことだ。良からぬ計画を企てていても何ら不思議ではない。

「――」

そうこう思考を走らせている内に、宗主――父親の自室の前に辿り着いていた。明らかに他の部屋とは違う高価(たか)そうな襖を扱っており、その向こう側からは源三の声と、男性とも女性のものとも取れる中性的な声が聞こえる。

（……もう来てるのかな？）

と、不意に思った疑問を口には出さず、碧海は姿勢を正して、襖の奥に呼びかけた。

「碧海です。宗主、お入りしてもよろしいでしょうか？」

『――入りなさい』

一拍の間の後、低い声でそう許可が下った。

碧海は「失礼します」と控えめな声で言い、両手を取っ手に掛けて、静かに襖を開けた。

そこには、この四泉一族を実質的に支配している実の父親――四泉源三（せんげんぞう）と、黒いロングコートを身に纏い、胡坐を掻きながら無愛想な表情を浮かべている少年の姿があった。

こうして、二人は邂逅（であ）った。

努力で力を極めた少年と、才能で力を極めた少女の初対面であった。

皇景一という人間

碧海がまず初めに思ったこと。それは、この時期に彼と出会ったならば殆どの者が自然と疑問に思うものであった。

「……なんで、ロングコート？」

気づけば、碧海は小首を傾けながらそう呟いていた。いや、他意は全くない。ただ、暦はもう六月に迫っているのだ。そんな季節にロングコートを着て暑くないのか、という彼女なりの――少し歪曲気味な――意見だった。

訝しみを篭めた視線を向ける碧海に、黒いロングコートを着た少年は一度だけ目配りをし――しかしすぐに背けて――呆れたように小さな溜息を漏らした。

「――皇景一だ」

「え？」

「初対面なんだ。名乗るのが当然だろ」

目も向けずに、無愛想な表情のまま少年――皇景一はそう言った。

「あ――え、えっと」

常識を説かれた碧海は、少しばかり頬を朱に染めた。先ほどのは無意識に呟いた言葉だったが、どうやら気に障ってしまったようだ。

「初めまして。四泉碧海です」

「知ってる。宗主から聞いた」

景一は条件反射のようにそう返答した。落ち着きすぎた声音が、何を思考しているのか分からないという理解の妨げを作り出している。

「……」

一方で、碧海はこう思った。

……その、何というか非常にやりづらい相手だ、と。

他者との会話術にはそれなりに自負している碧海なのだが、どうも会話を続けさせる手段が見当たらない。当の本人が会話を毛嫌い

している様でもない――つまりは自分にそれほどの関心を抱いていなさそうなところが、またコミュニケーションを阻害する一因と言えた。
なので、碧海は先程まで何らかの会話をしていたであろう源三に助けを求めるように一瞥を送った。
「……とりあえず話を始めるので、皇くんの隣に座りなさい」
見ると、下座側である景一の右隣には座布団が敷かれてあった。

「この度、何でも屋を営んでいる皇くんを雇ったのは、この町に出没を始めた大量の魔的意識体を滅すること。ひいてはお前の護衛を頼む為だ」
碧海が景一の隣に正座で座り、源三が最初に切り出した言葉がそれだった。
しかし、碧海は現宗主の提案に怪訝とした感情を覚えた。それは、魔的意識体の滅することに景一が支援を行うことに対してではなく、その後の言葉――自分の護衛という任務を彼に託したからだ。
「それはどういう意味ですか、宗主？」
故に、表情には出さずとも反発感の顕れが生じた。口調に多少の強まりがあったのが唯一の証である。
それは、十三歳になった時の初任務以後、自分の力が認められたという解釈をしていた彼女にとってあまりにも予想外な依頼の提示だったのだ。
故に、不信感を覚えるのは当然と言えた。
「皇さんの実力は認知していませんが、今まで私に護衛を就けたことはなかったではありませんか。私の力に信頼が持てなくなったのですか？」
「そういうわけではない。だが、今回の件において、私は十分に危惧すべき事態だと認識している。万が一ということもあるであろう」
「ですが――」
「口を挟んで悪いが」

と、反論を試みようとした碧海の前に、景一が話に参入する。
「この碧海ってヤツは、今回の件に関して『使える術者』なのか？」
景一は、素朴な疑問を問うように源三に話を振った。本人を前にして堂々とそのような発言する辺り、相当肝が据わっている。
一方、碧海は横目で景一を睨んだ。宗主の御前である為、『無言の抗議』を行なっているのだが、当の本人は全く気にかけていない様子だ。
景一はさらに続けた。
「一族宗主の命を素直に引き受けない辺り自制心が成ってないように見える。そんな心的に成熟していない術者に任務を任せるのはどうかと思うが」
冷静な口調で、冷徹な言葉を放つ景一。自然、睨みつける碧海の視線はさらに鋭くなる。肩を小刻みに震わせている辺り、この男の暴言が完全に神経を逆なでしたようだ。
「碧海」
と、まさしく爆発寸前の彼女に、源三は一言を以って釘を刺す。
「……ええ、承知しています」
碧海はにっこりと笑いながら言った。
（……全く。怒っているのが丸わかりだろうて）
という言葉は口にせず、源三は一つ咳払いをして、碧海の『実力』を景一に説いた。
「皇くん。この娘の実力は私が保証しよう。我が一族の意識術――殺気意識術においては『裏の義』を解読済みだ。任務の邪魔にはならないだろう」
……ピクッと、碧海の眉の両端が少し上向いた。
源三は娘の実力を丁寧に説明したつもりなのだが、『邪魔にはならない』という言葉が、碧海を完全に誤った解釈へと導く。
その言葉は、自分よりも景一の実力を信頼しているという紛れもない証拠であったからだ。
「そうか。まあ、邪魔にならないなら問題はない」

さらに追い打ちを掛けるように――意図的かどうかは置いておき――景一は平淡な口調で言った。
「では、この件の本題に入るが――」
と、源三が話の軌道を戻そうとしたその時、碧海が静かに立ち上がった。
「……どうした、碧海？」
「退席させてもらいます。この件に関しての話は、後ほど付き人から伺います。後はお二人でどうぞ」
先ほどの作り笑顔は完全に消え失せていた。碧海は無表情でそう言い捨て、襖の奥へと姿を消す。
「……怒らせてしまったか」
やってしまった、とばかりに白髪頭を掻き毟る源三。
対し、景一は呑気に用意されていた茶を啜っていた。
「話してもいいことは伝えられたんだ、十分だろ。というか――」
湯飲み茶碗を元の位置に戻し、景一は唇の両端を微かに吊り上げた。
「あんたの娘を見ていると昔を思い出すな」
「――ほう？」
源三も同じく、ニヤリと口角を上げた。こちらはどこか嬉しげな笑みだ。
「皇くんも、昔はあのようにやんちゃだったのか？」
「俺も人間だぞ。ガキの頃があんな感じなのは当然だろ」
「……まあ、碧海と同い年という突っ込みは置いておこう」
源三は苦笑しながら、「では――」と景一の現在（いま）の在り方に触れた。
「君が確固たる自我を形成したのは、半年前、創世の塔の最高幹部であることを辞めたからか？」
「そうだな」
拍子抜けするほどに、景一はあっけなく答えた。
「それまでは俺もただのガキだったよ。自分勝手で、我儘で、世界

は自分を中心にして回っているとか考えてたかもな」
「ならば、何が君を変えた？　意識術師として最高の名誉を授与されたにも拘らず、君を『何でも屋』という地位すら皆無な職業へと誘った要因――それはなんだ？」
四泉源三は、皇景一という人間の全てを見透かすような視線を向ける。
興味本位でも、ただ関心があるというわけでは断じてない。
源三は、若干十七歳にして自分という存在を確立させてしまったこの少年を知りたかったのだ。
「――踏み込むか？」
「君の許しが出るならばな」
引く気はない、という意思を篭めて源三は言った。
「まあ、たまには昔話もいいかもな。――簡単に言えば、運命とやらを変えたいと思い至ったからだよ」
己を嘲笑うような笑みを浮かべ、皇景一はその過去を話し始めた。

契約完了

源三の自室から退席し、五十畳の大広間で朝食を済ませた碧海は、頬を膨らませて『いかにも怒ってますよ』という雰囲気を醸し出しながら自分の部屋に向かっていた。

（なによ、二人してっ）

景一はともかくとして、実の父親にまで自分の実力を貶される――少なくとも碧海にはそう見えた――とは思わなかった。あんな無愛想な顔の少年のどこに、自分を下に見られるだけの力があるというのか。

とはいうのも、先ほど彼の隣に座っていた際、碧海は密かに意識変革を行ったのだ（源三にバレない程度の微細な変革だが）。

それは、小池に居た時に使用したものではなく、戦闘において扱う意識変革だった。敵の潜在能力を計測（はか）る為の技だ。

しかし計測結果は、どうもあの不遜な態度とは対極といえるものであった。

結論から述べると、意識術師として『強者』とは思えない計測結果だったのだ。

意識変革の階位は最高でレベル3……これは意識術師として高位である証だが、その他、つまりは意識の向上以外の技巧、体術も身体能力も平均値と大して変わらないものだった。

「まさか――あの人、詐欺師なのかな」

何か不吉な予感がしてならない。あんな男だか女だかよく分からない顔立ちをしているのだ。性別を偽って、さらには創世の塔に所属していた皇景一を騙っている人物かもしれない。

（何か、考えるとそんな気がしてならなくなってきた……）

疑念の方向性は確実に定まり始め、自分の顔が蒼顔になっていくのが解った。

「どうしよう……もしあの詐欺師がウチの金庫とか狙ってたりした

ら――」
「安心しろ。詐欺師じゃない」
いつの間にか立ち止まって悶々と考え続けていた彼女に、背後から誰かが声を掛けた。
ハッとして、碧海は振り向いた。そこにはいつに間にか――気配すら見せずに――皇景一が両手をコートのポケットに突っ込んだ状態で佇んでいた。
「あ、あなた、いつの間に――」
碧海は愕然としながら、その矛盾に混乱していた。
「――は？」
対して、景一は過剰に狼狽えている碧海を怪訝に見据え、そんな呟きを漏らす。
碧海は唇をわなわな震わせ、顔を真っ赤にして叫ぶ。
「わ、私は自分を中心とした半径五メートル範囲には意識結界を張ってあるの！　誰かがこの陣（サークル）に踏み込んだら意識機能が働くよう設定してるのよ！」
「だからなんだよ？」
こちらは変わらず、平淡な口調で景一。
「だ、だから……なんで陣（サークル）の内側にあなたがいるのに、私が気づかなかったのかってこと……」
碧海は顔を赤面させ、視線を背けながら小声で言う。どうやら、いつの間にか意識結界を疎かにしたことを恥じているようだ。
「――あぁ」
と、景一は納得したかのように小さく頷いた。
「それ、あんたのせいじゃないから安心しろ」
「え……？」
「単に、俺が破っただけだ」
……その言葉が何を意味するのか解らないほど、碧海は馬鹿ではなかった。
意識結界とは、簡単に言うならば『ここからここまでの空間は【

自分の意識変革によって成り立っている隔たり】ですよ』という、他者との境界線を構成する結界である。人払いなどに分類される意識結界などはまた違ってくるのだが、一般的な意識結界の大抵は、この設定（ルール）が前提となっている。

つまり、意識結界を張った術者は、結界内部全体を常に意識しているということだ。

そして結論で言えば、景一は結界内部という『幾重にも張り巡らせてある碧海の目』に気付かれないように侵入を果たしたのだ。

それは結果的に、術者としての実力が完全に上を行っているという証拠で――

「――ッ！？」

「というか俺からも言わせてもらうが、勝手に人の力を計測するな。プライバシーの侵害だぞ」

さらには、感づかれる筈がないと思っていた計測行為も完全にバレていた。

「まあ、あんたが計測して得たのは、測られる直前に演算処理した嘘の結果だからどうでもいいんだけどな」

「～～～～～っ！！」

碧海は小刻みに肩を震わせ、耳まで真っ赤に染めながら、この男に「もう黙ってくれ」という最上級の念を送った。

なんというか、もの凄い辱めを受けている気がしないこともなかった。

「……それで、私に何か用ですか？」

「用があるからこうして対面してるんだよ。阿呆」

侮蔑も顕わに、景一はそう言った。次いで木造の壁に寄り掛かり、腕を組んで話し始める。

「俺は雇われの身だからな。実力はどうであれ、今回の件であんたの護ることを拒否できないんだ。まあ、宗主直々の頼みもあるんだが……」

と、そこまで言って景一は首だけ横向けて、碧海に視線を定める。

「あんたは、本当に護衛されるつもりはないのか？」
「……」
碧海はわずかに目を伏せながら、思考を走らせた。
確かに、意地を張っている場合ではないのかもしれない。昨夜も分家の術者が二人殺されたのだ。源三の危惧は最もだし――何より、この男の実力の一片を垣間見た以上、最高の護衛になることは間違いないだろう。
しかし――自分の内にある『何か』が拒みの感情を促す。
そう。それは紛れもなく、初任務で認められたあの日の出来事が起因していた。
「……何があんたをそこまで拒ませているのか、俺には見当もつかないし、理解する気もない。だが――承諾の意を示したなら、俺は全力を以ってあんたを護らせてもらう」
その言葉を聞いて、碧海はそれに気付く。
（ああ、そっか――）
この感情の正体が、ようやく分かった。
あの日、彼に言われた台詞と瓜二つであるから。しかし、彼がそれに失敗してしまったが故、いつの間にか自分の心（なか）で『護られる立場』というものを拒んでいたのだ。
「――分かりました。では、全力で護ってもらいます。失敗は許しません」
踏ん切りが付いた碧海は、真っ直ぐに景一を見据え、そう口にした。
対して、景一は不敵な笑みを浮かべ、
「了解した。巫女姫さん」
こうして、護衛の契約は結びを終えた。

可能性

今回の『用事』を終えた景一は、一旦仮住まいのビジネスホテルに戻る為、屋敷を後にした。

そして、その直後に源三から呼び出しが掛かったのは何か魂胆があると疑ってやまなかった碧海だが、断るわけにもいかないので自室に顔を出す。

「……まだ怒っているのか？」

襖を開ける音がいつもより荒々しかったせいか、源三は眉を顰めながら、呆れ気味に言う。

しかし、碧海は上座の席に静かに正座をしながら、

「いいえ、もう怒っていません。彼の実力は少しだけ理解できましたので。宗主が皇さんを雇ったのも納得がいきました」

癪に障るが、確かにあの男は自分より実力が上であるだろう。これで長年外部の人間を雇わなかった源三の思惑、その一片を理解でき得た。

「――それで、私に何かご用でしょうか？」

「……二人の時くらい、敬語は止めたらどうだ、碧海？」

一族を束ねる宗主としてあるまじき言動にも思えるが、彼にとっては親子だけの時間くらいありのままで接したかった。

源三は一族の宗主である前に、一人の父親なのだ。立派に成長してくれた愛娘だからこそ、少しは親子としての接し方をしてほしい。

しかし、当の碧海は立派に成長をしすぎてしまった、というべきか。一族の術者としての心構えを持っていて、尚且つ自分は一族の皆と同じ立場であるという認識をしているのだ。

彼女は一人の子供であることを蔑ろにし、一人の術者であることを優先している。それが近頃の源三の悩みの種であった。

「お前はもう少し童心を重んじるべきだ。その歳で『完璧』を目指す必要がどこにある？」

故に、自然と咎めるような口調になってしまうのは仕方のないことだった。
「私と同い年の皇さんは完璧に見えました。だからこそ、宗主は彼を雇ったのだと思ったのですが」
対して、碧海は気圧された様子もなく、凛然とした態度を崩さずに言った。
「……馬鹿を言うな。彼は完璧などではない。むしろその逆だ」
源三がため息混じりに口にしたその言葉に、碧海は怪訝として眉を顰めた。
「どういう意味ですか？」
「近い内に自分で尋ねてみなさい。彼にそのような言葉を口走ったら、おそらく鼻で笑われるだろう」
さて、と源三は一方的に話を終わらせ、胡坐を組み直しながら、
「先ほど、お前が退席したため話の本題に入れなかった。皇くんにはすでに説明を終えたので、お前にも話しておく」
誰のせいですかと胸中で呟きながらも、碧海は言葉には出さず次の言葉を待った。
「今回、この町に出没を始めた大量の魔的意識体。この四日間で滅した数は五十二にも上ったわけだが……お前はどう考えている？」
どう、という問いかけは、おそらく異常なまでの大量発生を示すものではない。その本質的な意味はまた別のところにあった。
源三の含みのある問いの意味を理解した碧海は、険とした表情で言う。
「――任務に就いた私個人の見解に過ぎませんが……おそらく、現在身を隠している魔的意識体は自我を持っています」
確信めいた口調を以って、碧海はそう断じた。
「五十二にも及ぶ魔的意識体の遠隔操作、と言ったところでしょうか。この四日間で滅ぼした魔的意識体は、分家の者ですら手間を取らせる戦闘力でした。殺気意識術が通用しないという局面すら発生していますし、何より、集団での行動力が人間のそれと同一です」

魔的意識体とは、妖魔、邪霊が滅びた際、現世に残した精神の残滓だ。妖魔、邪霊には元より自我というモノは持っておらず、殺戮本能のままに行動を起こすだけの存在である。

それが何百という同族――同じく滅ぼされた他の妖魔、邪霊の精神と結合を果たし、ようやく魔的意識体は完成する。

そして、ここで問題となるのが、魔的意識体が何百もの同族と結合した、という事実だ。

およそ数百の精神が混合状態に及ぶ。それは最早自我の形成が不可能な状態に陥るということだ。自我を作る云々より、数百の精神が混合した状態で魔的意識体という存在の核を司る自我（せいしん）を形成できるわけがないのだ。

それが魔的意識体という存在における常識の論であり、数千年前からの伝承でもある。

しかし、通常の魔的意識体を超越した魔的意識体がこの町に現れたとなると話は大きく変わってくる。

碧海は、今まさにその仮説を話しているのだ。

「結論から言うと、魔的意識体の上位概念体――戒鬼（かいき）がこの町に出没したと私は考えています」

そう、ここで最も確率の高い仮説となってくるのが、魔的意識体を思うがままに操ることのできる上位者の存在だ。

「……自我を持ち得ることに成功した魔的意識体、か。皇くんもお前と同じ仮説を立てていた。その可能性は大いにあり得るだろうとな」

もし、この仮説が是であるならば、最上級の危惧を持たなければならない。

戒鬼は並大抵の意識術師が戦える相手ではない。四泉一族の中で戒鬼（かれら）と互角の勝負を持ち込めるのは、おそらく碧海と、ここにいる四泉源三くらいだろう。

「今回の件、勝利の要となるのはお前と皇くんだ。お前には今夜から皇くんと行動してもらうことになるが、いいな？」

「――分かりました」
もうどうこう言っていられる時間はない。彼は自分を護ると言ったのだ。それならば、存分に護ってもらおうではないか。
（――だけど）
と、碧海は密かに一つの決意を自身へと下す。
その時は、自分の実力も存分に見せつけてやる、と――。

戦闘前

時刻は夜の九時を回り、四泉一族の術者は各々に行動を開始した。
魔的意識体に対抗する作戦は碧海が立てており、分家の者には『通常の魔的意識体と判断したモノだけ滅せよ』との指示を出している。
戦略においては、分家の術者が三人一組（スリーマンセル）で行動し、魔的（てき）意識体と遭遇した場合、一人が人払いの意識結界を張って一般人への確実な安全を取り、残った二人が前衛で戦うというものだった。
三人一組のチームは全部で四つ。どのチームも分家では高位の術者という面子だ。
魔的意識体の数はこの四日間で五十二体に達したが、一日の平均で言うならば十体前後だ。今回招集した高位の術者――それも三人一組で行動している――ならば、対応に困ることはないだろう。
この時点において、碧海はそう確信していた。

そして、彼女を護衛する役目を担った皇景一が現れたのは、分家の者が全員町に散った時だった。
「待たせたか」
白地のシャツにジーパン、黒色のロングコートといった出で立ちは今朝見たものと同一だった。
碧海は景一の顔を見据え、静かな口調で言う。
「いえ、指定の時間通りです」
「今夜は巫女服じゃないんだな」
「当たり前です。街中を巫女服で巡回するわけがないでしょう」
碧海の服装は薄地の白色タートルネックシャツに紺色のロングパンツと言った服装をしていた。似合う似合わないという問題以前に、戦闘の際に動きやすい服装を選択した結果、この服装になったのだ。
「では、私達も街の巡回を始めましょう」

「――その前に、一つ提案があるんだが」
「……？　何ですか？」
と。景一は片手をポケットから抜き、頬を人差し指でポリポリと掻きながら、
「とりあえず敬語をやめろ。気持ち悪い」
かなり面倒臭げな口調で、そう言った。
「……はい？」
「だから、同い年なのに敬語で相手をされるのが気持ち悪いって言ってるんだよ。もっとフランクな口調にしろ。今朝、屋敷で恥ずかしがりながら怒鳴った時のあれだ。というか、何でわざわざ口調変えてるんだよ？」
「な……っ！？」
カアッ、と一気に顔を真っ赤に染めて、碧海は言葉を失くした。
当然だ。普段は誰にも――父である源三にも――見せはしないが、あれが素の自分だと彼女はしっかり自覚しているからだ。
そして、この男はそれを完全に見破っていたというわけだ。
「虚勢張るのは結構だが、俺を相手にする時はやめろ。やりづらい」
「わ、私は虚勢なんて張ってないわよ！」
顔を赤らめながら、精一杯の反論をする碧海。
対して、景一は呆れ気味に溜息を吐きながら、
「それでいいんだよ」
「え？」
「だから、今みたいな感じで接して来いってことだ。それが素なんだろ？」
「……う」
言葉に詰まった碧海は、赤面状態で目を逸らした。
「まあ、虚勢でないにしろ、俺の前では気を張る必要はない。今みたいな感じで頼むぞ」
勝手に話を進める景一を半眼で睨みながら、碧海は思考を廻らせた。

（……まあ、敬語を使う相手じゃないわね）
むしろ、何で今まで敬語など使っているのだろうか、とも考えたがそれは置いておくことにする。
ともあれ、確かに同い年で敬語――それも自分だけが――を使うのもおかしな気がしてきた。それもこの男は敬語どころか失礼な言動ばかりしているのだ。そう考えると納得のいかないものもある。
「……分かった。じゃあ、敬語はやめるわ――って、あれ？」
景一の意見に妥協した碧海だが、肝心の彼がいつの間にか傍にいなくなっていた……というかもう十メートルほど前方の巡回ルートを歩き始めていた。
（ホント、調子が狂うわね……）
確実に――しかし彼女にとって『良い意味』での――苛立ちを募らせながら、碧海は景一の後を追った。

一刻の間、両者の間に言葉はなかった。
碧海はすでに感覚器の機能向上――【至高体験段階】であるレベル2までの意識変革を済ませており、魔的意識体の気配を探ることに集中していた。
現在通っている大通りのルートは特に人が多い。人間の気配と魔的意識体の気配を見間違わないよう注意を払いながら、碧海は周囲に目をやり続ける。
一方、隣を歩く景一は真っ直ぐに前だけを向いて歩いていた。魔的意識体がどこに隠れ潜んでいるのか探っている様子も窺えない。
だからこそ、碧海が様子を訝しむのもおかしなことではなかった。
「皇さん――」
「皇でいい。――あぁ、俺だけ注文が多い気がするな。俺もあんたを四泉って呼ぶことにする」
「……皇。あなた、意識変革は起動していないの？」
「どういう意味だ？」
「だって、魔的意識体の気配を探っているようには見えないし、意

識変革を起動した後の余波を感じないから」
　意識変革を起動させた場合、向上した『意識』が術者の力源（エネルギー）として微細な余波を生み出す。それは意識変革を行った者を力場として外部に生じるモノであり、高位の意識術師ならば、およそ半径五百メートル範囲の余波を感じ取ることが可能となる。
　しかし現状として、碧海は景一の真隣を歩いているのに、意識の余波を全くと言っても良いほどに感じていない。つまりそれは、彼が意識変革を行なっていないということを如実に示しているのだ。
「俺は魔的意識体を感知するのに意識変革は行わない。というより、する必要がない」
「……なぜ？」
　怪訝に訊く碧海。
　景一は変わらず無表情のまま、言葉を紡いだ。
「確かに、魔的意識体の気配を感知するのに、あらかじめ意識変革を済ませるのは常套手段だ。それを行うことで、魔的意識体と遭遇した際、【意識術行使段階】――レベル3まではたった一段階の向上で済むからな。遭遇から初手までの動作を極力早めたいのなら最善の手と言える」
　碧海は少し不満そうに顔を強張らせた。……本音を言うと、彼女の行った尋ね事は『なぜ意識変革をしないのか』という意味合いのみであり、景一のようにそこまで先のことを考えていなかったからである。
淡々とした口調で話を進める景一は、「で、お前の質問に答えると――」と話の本質を説く。
「俺の場合、普段の状態がレベル2だから、現時点で意識変革をする必要がないだけだ」
「……は？」
　少し、言っている意味がよく解らなかった。耳がおかしくなって

しまったのだろうか。
「ちょっと、それはどういう――」
と、碧海はその意味を問い正そうとしたが、その時感じた一つの気配によって言葉は途切れた。
「――現れた」
剣呑とした表情で呟く碧海。
景一は「あぁ」と静かに首肯した。
「人払いの意識結界を形成する。東西南北、四方に渡って半径百メートルくらい――」
と、不意に景一の顔が微かに揺れた。動揺ほどのものではないが、明らかにこの現状を訝しんだ表情だった。
「――他でも始まったみたいね」
別の場所での戦闘が開始された。意識の余波が体に伝わってきたのがその証拠だ。このタイミングからして、核とされる魔的意識体は確実に存在すると断じても良いだろう。
「あぁ。だが……これは一体どういうことだ？」
と、今度こそ確かな動揺を表すように顔を顰めた。
「どういうことって？」
「現在の戦闘区域は大きく分けて四カ所。それはまだ理解できる。四泉、今回の任務において分家筋の高位術者は全員連れてきたらしいな？」
「ええ」
「……やっちまったか。まあいい、あの人なら完璧に対処するだろう。――来るぞ」
いつの間にか二人だけとなった意識結界（せかい）内で、景一の呟きは明瞭なまでに響き渡った。
そして、それは徐々に集束を成していく。
意識術師によって滅ぼされた魔の残滓、その起源と言える極小の粒子が集まり、一個体の生命へと変貌を遂げていく。
「――中々に巨体だな」

景一は冷めた目を向けながら、その存在の第一印象を呟いた。
二人の十メートル前方に、それは自身の存在を誇示するように浮遊している。
妖魔、邪霊の上位概念体。その通称に相応しい姿を以って現界を果たす。
二人の眼先には、螺旋状に渦巻く巨大な黒い霧――そしてその中心に、全てを咀嚼する『口』が在った。

第一戦

現界した魔的意識体は、明らかに非現実的で、異形と呼ぶに相応する姿と言えた。

存在を象っている円形の黒い霧は、おそらく集束した魔的意識体の中でも下位的な意識体（せいしん）の部位であるのだろう。本命と呼べる意識の具現先はその『口』だ。

黒い霧の中心部にある大きな『口』。丁寧に朱色の唇まで形成しており、その内部は鋭利に尖った牙が綺麗に並んでいた。

あの口に呑まれたら死は免れない。そんな外的印象を受けさせるが、碧海は恐れずして一歩足を踏み出した。

「皇。あなたは私が使える術者なのか、と言ったわね」

その在り様において、畏怖や慄きの感情は皆無。

彼女の凛然たる在り方に、そのような余分なものは不要だ。

黒瞳（こくどう）に魔的（てき）意識意識の姿を収め、彼女は高らかに言った。

「――これから見せてあげるわ。私の『実力』というものを」

瞬間。彼女を力場として生まれた意識の余波が、烈風と化し荒れ狂った。

碧海は、己が内界に宿る禁忌（ちから）の【意識】を始める。レベル2からの階位向上は、意識という概念を無心の集中力によってどれだけ高められるかに尽きる。少しの雑念や煩悩があった場合は、意識がレベル3へと成立した際、能力のキレが落ちるのだ。

しかし、碧海は正しくその逆であった。

熟練され、洗練された高い集中力は、異常なまでの階位向上を齎していく。

「――ほう」

後方で静かに佇んでいる景一は、感心したように小さな呟きを漏

らした。
　ここまでの潜在能力を内包していたとは思っていなかった。これならば、確かに四泉一族の直系に生まれただけのことはあると納得できる。
「意識変革――レベル３」
　その証というべき現象が、彼女の体に纏い始めた。
　何物とも比べられない絶世の光。それは彼女のみに与えられた聖なる光。四泉碧海が具現化させた金色（こんじき）の殺気だ。
【光の巫女】という彼女の二つ名に相応しい力――『殺気色彩論』における最高位の殺気と称される『光錬（こうれん）』の具現化。
「――では、いくわ」
　最強の殺気を纏った碧海は、瞬時に右の掌を魔的意識体へとかざす。
　そして、掌から黄金の光錬（さっき）が放たれた。
　弾丸のように疾く、射撃のように精密に。
　一種の槍と化した無数の光錬が、魔的（てき）意識体の体を勢い良く穿つ。
「■■■■■――！！」
　魔的意識体が声と言えない悲鳴を上げた。
　手始めとして放った槍状の光錬が、螺旋状に渦巻いている黒い『影』の部位――存在としての意識が少ない円周側八方を撃ち貫いた――ように見えた。
　黄金の槍は、黒い影の円周側八方を貫いた瞬間に動きを止める。
　それは、まるで罪人が受ける磔刑のような光景だった。八方を刺し貫かれたが故に身動きが取れず、槍の貫通によって苦痛をも伴うこととなる。
「四泉流捕縛術、第二章ノ五説――刺突円縛（しとつえんばく）」
　碧海の掌が、虚空を掴むかのように強く握られた。
　そして静かに、しかし術に対する明確な【意識】を孕んだ口調で呟く。
　ほぼ瞬刻、八方の部位を貫き行動を捕縛した黄金の槍に異変が生

じた。
金色の色を保っていた八つの槍が、さらなる輝きを放ち始める。
碧海は捕縛に使用した八つの光錬に、　レベル３に達した意識の力源（エネルギー）を二度（にたび）に渡って上乗せる。
そして、碧海は誘爆への紡ぎ言葉を発した。
「――裏乗（りじょう）・爆導八（ばくどうは）」

瞬間。
巨大な轟音と共に、捕縛を目的に使用した八つの光錬が一斉に爆ぜた。
個体として最初から意識の量を定めていた八つの槍。碧海はそこに二度、同じ力源（エネルギー）を上乗せた。
それによって生じる現象。それは八つの槍が個体としての意識量を保てなくなくなるということだ。
蓄積量が定まっていた個体に同じ蓄積量を上乗せし、意識量をパンク状態へと陥らせ、自然誘爆に至らせる。
その結果が、これだ。
体の円周部位八つを貫いた最高位の殺気が一斉爆発した。それによって、下位的な意識体によって形成されていた黒い影は完全な消滅へと至った。
残されたのは、その生理的嫌悪感すら抱かせる巨大な赤色の唇と、白く鋭利な牙。
（――不快ね）
とてもこんなモノを見続ける気は起こらなかった。
碧海はもう一度右の掌をこの醜悪な存在へとかざし、原型も残さず滅する為に意識を高めていく。
そして光錬は開放された。今度は大出力による大型のレーザー砲のそれだ。本体を破壊すべく放たれた殺気という名の光は、必然的に滅殺の一撃と成り得るだろう。

……と、その時。

その巨大な唇が、嗤うような歪みを見せた。

「――ッ！」

碧海の背後に佇んでいた景一は、魔的意識体の微細な仕草の意味を理解し、瞬時に彼女に命令を下した。

「四泉！　今すぐ開放した殺気を消失させろ！」

「え――」

しかし、景一の咄嗟の命令は完全に遅かった。彼の叫びを正しく認識し、そちらへと意識を向けたとき、光錬はすでに魔的意識体の一メートル手前まで迫っていたのだ。

そして、この局面にきて魔的意識体は初めて行動を起こした。

その巨大な『口』を開き、光錬の一口で呑み込んだのだ。

「な――」

碧海は上擦った声を漏らした。

それは、この事実が許容できないが故の反応であった。

光錬を飲み込むなど、論理的に考えて不可能なのだ。彼女の光錬は、殺気意識術の類でも最高位の意識として成立している。たかが魔的意識体が、意識力の七割を内包し放った一撃を飲み込んで普通でいられる筈がない。

しかし、現に前方に在るその巨大な『口』は、呑み込んだ光錬の味を存分に味わうように、口元を動かし続けていた。

――そして、不意にその動きが止まる。

口元は、あたかも『不味い物を喰った』と言わんばかりに歪み始め、その一泊後――

『ガハアッ――！！』

魔的意識体の口内から光錬が吐き出された。しかも、吐き出す直前に軌道の方向性や速度も同一にしたのか、碧海目掛けて直進する光錬は、彼女が開放した時と同じスピードを保っていた。

「あ――」
故に、この時点において身体能力の向上を行なっていなかった碧海は、この反射攻撃を躱す術が思い浮かばなかった。
この時、迫り来る死に対して碧海は初めて畏怖の感情を認識した。
自分の放った攻撃によって殺されるなど、なんて無様な失態だ、と自分の声が頭の隅に過ぎる。
「慌てるな」
しかし、碧海が一瞬思い浮かべた自分の死体というイメージは、背後に居る皇景一の一言によって幻想へと昇華される。
「――世界の意識よ。その理を変えろ」
そして――景一の開放した意識術によって、昨夜と同一の現象がこの場において形成された。
直進していた光錬が、碧海の一メートル眼前で止まった。
この瞬間。いや、彼が呟いたその刻(とき)から。
何の前触れもなく、卑劣な手段と呼んでも良い最大強制を以って――
意識結界内で起こる全ての事象を、景一は掌握した。
「光錬が、止まってる……？」
と、そこまで考えて、碧海は即座にそれは違うと本能で理解する。
その証拠に、魔的意識体さえ微細な動き一つ見せずに大きく口を開いたまま硬直していた。
だからこその認識だった。
――この瞬間(とき)。確かに世界の時間が止まったのだ。
「多方面への意識くらい向けておけ。俺が時間を殺さなかったら死んでたぞ」
緩慢な足取りで碧海に近寄る景一は、いかにも不機嫌そうな顔を

していた。
「あ、あなた、これ、どうやって……」
対し、碧海はただ呆然とその場に佇立したままだ。
景一は碧海の前で立ち止まり、その混乱している彼女の問いに応じた。
「俺の意識術だ。四泉が『殺気』という意識術の禁忌（ちから）を持っているように、俺の家系――皇一族も、『時間』という意識術を禁忌（ちから）として操れる。流動、脈動する時の支配。ひいては時の逆転、反転。後は小規模だが、『有る筈だった未来を実現できる』ってところだな」
「有る筈だった、未来……？」
その言葉で、碧海は自分の鼓動が一段と大きく跳ねたことを自覚していた。
景一は溜息を吐きながら、「まあ、これは意識結界の所有権が俺にある場合だけなんだけどな」と言葉を付け足す。
「意識結界は、形成した術者の全意識が浸透した空間だ。だから、俺が意識術を起動した際、意識結界内の時間という概念は俺が掌握することになる」
平静な顔で説明していく景一は、碧海の隣をかわし、停止状態の光錬の前に立つ。
そして、じっくりと光錬を見据えながら、
「――やっぱり、か」
と、何かに納得したように呟いた。
「昨夜の戦闘においても、分家のヤツの放った殺気意識術を喰っていた。そこからしておかしな話だと思ってたんだが、これなら理解に及ぶな」
「……どういうこと？」
すでに平静な心を取り戻している碧海は、景一にそう尋ねる。
景一は横目で碧海に一瞥を送り、
「――四泉。お前、今回の事件の犯人を戒鬼だと睨んでいるみたいだな」

「ええ。私の個人的な見解に過ぎないけど」
「――――」
碧海の返答に、景一は黙り込んで思案顔になった。それを数秒続けると、
「分かった。とりあえず魔的意識体を殺すぞ」
またもや勝手に納得し、魔的意識体に目を向けた。
「意識変革、レベル3」
意識術行使段階へと足を踏み入れた景一は、右手をパチンと鳴らし、小さく韻を踏んだ。
「時間反転。我が【意識】を以って、有る筈だった未来よ、現実と成せ」
その瞬間、光錬がコンマ〇・五秒の速度で逆走し、魔的意識体の本体を破壊した。
「――――」
その、圧倒的すぎる意識術に、碧海はただ唖然としていた。
しかしすぐに、不満気な表情を浮かべる。
（……なんで、こんなにも――）
「実力の差に拘るなよ」
しかし、碧海が胸中で呟いた不満に気づいているように、景一は顔を顰めた。
「俺の意識術は、意識結界があって成り立つ小細工に過ぎない。味方の攻撃を応用して、初めて戦闘に参加できるものなんだ。一人での任務だと、けっこう苦労することばかりなんだぞ。と――」
景一は夜空を見上げ、その確認を終える。
「他の四カ所での戦闘も終わった。どうやら四体の魔的意識体は消滅したらしい。今日の護衛は終わりだ。
お前も早く屋敷に帰れよ。それなりに大事なことに変わりない」
「え？　それってどういう――」
と、いつの間にか俯かせていた顔を上げるが、そこにはすでに景一の姿はなかった。

見ると、再び人影が現れ始めた。どうやら、彼は意識結界を解除したようだ。
そして、碧海はズボンのポケットで携帯電話が振動していることに気づく。
ディスプレイを見ると、屋敷からの電話だった。
「――はい、碧海です」
いつもの口調に戻し、平静な声で電話に出る。
しかし。
「――え？」
わずか二秒後、碧海の体と心が一瞬にして凍りついた。
電話の主は、自分の付き人である女性。
彼女は酷く狼狽えた様子で、こう言った。
宗主が魔的意識体に襲われ重症を負った、と――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5645z/

意識術師の時間流動

2011年12月28日02時07分発行